アラサーバックパッカー
欧州紀行

■1■

PROLOGUE

まつむらえいこ

PROLOGUE

「えーっと、イラクがどうしました？」

1990年初夏、ベルリンの壁はすでになく、記録的な好景気にある日本は紀子さまブームに沸きかえり、わたしは29歳になったばかりのプー太郎だった。夢と現実、希望と諦観の間をゆらりゆらりと揺れ動き、思うところあって会社勤めを辞めたのが一年前。人生の休暇はそろそろ終り、まっとうな生活に戻らねばなるまいという時期である。働かなければ喰えないのは理の当然。

わたしは思った。もうちょっとだけ、最後にもうちょっとだけ遊びたいなー。そうしたら、きちんと仕事を捜す。行きたいところに全部行って、遊び溜めをしておけば、きっとそれだけ真面目に働ける。

だから、それは休暇の総決算としての旅だった。

行き先は、とにかくヨーロッパ。学生時代に『地球の歩き方』を抱えてしたひとり旅、それは七年も昔の事だけれど、あんな旅をもう一度だけしてみよう。

優雅な旅がしたいわけではなかった。ブランドものの買付けに行きたいわけでもなかった。適度な常識と誠意の他には何も持たない。身ひとつで気の向くままに歩いてみたら気持ちがよいだろうと思うだけ。ファーストクラスで行く旅は、ひょっとしたらこの先に機会があるかもしれない。でも、バックパックを担ぐような旅は、もしかしたら歳をとるほど難しくなるかもしれない。ほんとうはそんな旅が一番好きなのだ。

妙に気分が高揚してきて、突然わたしはあちこちの旅

行代理店に電話をし始めた。今シーズンの相場はどんなものだろう。どうせヨーロッパへ行くなら、カイロにも寄ってみたい。そう欲張ると、一番安いのはイラク航空だった。南回りだが安さには替えられない。無職のわたしに金銭的余裕はさしてないのだ。

　バグダッドに寄るなんてちょっと素敵だわなどとも思い、さっそく予約を依頼し、じっと待つこと二週間、9月のイラク航空がとれた。

　チケットの次になくてはならないのが、トーマス・クックの時刻表。あちこち経巡って歩きたいというなら、これは必需品だ。さっそく本屋へ行った。七年前は丸善に注文したら三ヵ月かかると言われ、出発に間に合うかしらと不安がったものだった。それがなんと、いまでは欲しいと思ったその日に最寄りの書店で買えて、しかも開いてみると日本語版だったりするからオドロキである。

　8月2日のことだった。カイロに寄るのだからとエジプトのことなどを調べていると、ここ数日不穏な動きをしていたイラクがいきなりクェートを制圧してしまった。

「制圧って何？」

　ニュースを見ながら意味もわからず、思わず辞書をひく。広辞苑によれば〈威力をもって相手の勢力や気力をおさえつけること〉らしい。やっぱり、わからない。

「イラクが占領されたわけじゃないし、イラク航空の飛行機は飛ぶよね？」

　誰も答えてくれない。

　その日は、政治音痴のわたしがにわかに中東情勢の専門家になってしまうほど、終日、新聞とテレビにしがみ

ついていた。けれど、わかったのはフセインさんの行動はわけのわからないものだから、ひと月後に飛行機が飛ぶかどうかなんてなおさらわかるわけがないということだけだ。代理店のほうも、外務省から何か言ってくるまでは様子をみましょうという返事。

　ここはちょっと思案のしどころである。外務省は、危ないと思ったら「行くの、やめたら？」とは言ってくれるだろう。が、そのとき他の飛行機を手配してくれるわけではない。出発の二ヵ月前に申し込んでさえ、取るのに二週間かかったチケットである。他のエアラインに変更するなら早いほうがいいに決まっている。他のひとが動き出してからではもう遅い。とにかくわたしは予定通り９月に出発したいのだ。

　というわけで、翌日、イラク航空をキャンセルして他を当たってくれるようお願いした。その数日後にバグダッドで外国人が足留めされ、そのまま旅客が人質にとられるという事態になった。もし旅行の予定が８月だったら人質は自分だったのかなと考えると、ニュースを見ていてもとても他人ごととは思えなかった。

　ともあれ、わたしのほうはイラク航空よりさらに安いマレーシア航空のチケットを取ることができた。ただしこれだとカイロには寄れない。その代わりイスタンブールに寄ることにする。イスタンブール・インのパリ・アウト、9月12日に成田を発って翌月17日に戻ってくるという旅程だ。

〈成田－イスタンブール篇〉につづく

アラサーバックパッカー欧州紀行 ■完全版■目次

１　ＰＲＯＬＯＧＵＥ　「えーっと、イラクがどうしました？」
２　成田ーイスタンブール篇　「もしかしたら、ずっとナンパされ続けていた？」
３　アテネーサントリーニ島篇　「世界一美しい島に住むダメダメな奴ら」
４　アテネ篇　「この国の先行きが不安だ」
５　パトラス〜ブリンディシ航海とローマーミラノーマントヴァ篇　「海を渡り、夜行に揺られ」
６　ラヴェンナ篇　「小さな紳士と輝くトイレ」
７　サン・マリノ共和国篇　「妄想中世騎士道物語」
８　ヴェネチア篇　「街の灯りは紫色」
９　サン・モリッツ篇　「靴底が破れても雪山を行く（はめになった）」
１０　ノイシュバンシュタイン城篇　「年下の男の子を誘惑する（つもりなんかなかった）」
１１　リンダーホーフ城篇　「日本の女の子たちが世界中を旅している」
１２　ヘレンキムゼー城篇　「もうダメかと思ったとき力は目覚める」
１３　モン・サン・ミシェル篇　「お尻がこそげてなくなるほど自転車を漕ぐ」
１４　イリエ・コンブレ篇　「プルースト『失われた時をもとめて』をもとめて」
１５　パリ篇　「何者でなくても許される街」
１６　ＥＰＩＬＯＧＵＥ　「なくしたものは靴下を片方と洗濯ばさみが一個だけ」

奥付

アラサーバックパッカー欧州紀行 ■ 1 ■ PROLOGUE

http://p.booklog.jp/book/54749

著者：松村栄子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eikomatsumura/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/54749

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/54749

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ